

『論理学研究』における知覚の構造について

吉竹 浩克（関西大学）

1 本稿の目的

フッサールは、『論研』において「端的な知覚(schlichte Wahrnehmung)」という概念を用いる。また第六研究に入り、範疇的知覚の問題が扱われるようになると、フッサールは、例えば「端的に」、または「端的な仕方」、*「端的な性格」といったように、「端的(schlicht)」という語を頻繁に用いる。そして「端的な」性格をもつ知覚は、「端的な知覚、われわれにとって同じものとして見なされるが、感性的な知覚…」(XIX/2, 679)¹、「われわれは端的な直観の作用を感性的な作用と名付け、基づけられた間接的もしくは直接的に感性へと還元される作用を範疇的作用と名付けた」(712)といったフッサールの言葉によって、単に感性的知覚と同義またはその別称とされる。*

しかしそもそもいかなる点で「感性的(sinnlich)知覚」は「端的な知覚」であると言えるのか。そこで本稿では、『論研』におけるフッサールの知覚作用の分析を原初的志向(Elementarintention)のレベルにまで還元して追跡することで、「端的な知覚」と呼ばれる作用の構造を確認し、その概念の意味を明らかにしたいと考える。そしてそのことによって、フッサールの『論研』における知覚に理論にとって、この「端的な知覚」が極めて重要な役割を果たしていることを示してみたい。なお、本稿では範疇的知覚の問題を扱うが、範疇的直観に属する普遍的直観に関しては考察の対象外としている。

2 客観化作用の内的構造と原初的志向(Elementarintention)

「あらゆる志向的体験は客観化作用であるか、客観化作用を基礎に持ち」(514)、この客観化作用に判断志向や価値志向といった高次の作用が基づけられる。そして「あらゆる質料は客観化作用の質料なのであり、そして客観化作用を介してのみ、その作用に基づいた、新しい作用性質の質料となり得る」(515)。この客観化作用というクラスに属する意義志向と直観（もしくは知覚）との充実化綜合のみが、同一化統一の性格を持ち、狭義の認識統一の性格を具えている(584)とされる。

しかしフッサールは客観化作用に関して次のようにも記述している。まず「原初的作用(Elementarakt)の性格によって、複合作用の同質的な統一を規定する充実化綜合

¹ 『フッサール全集(Husserliana)』からの引用・参照箇所は、慣例に従い、巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で表記し、()に入れて示したが、本稿における引用文はすべてフッサール全集第19巻からのものであるため、これ以降はページ数のみの表記とする。また引用文における【 】は本稿筆者による補足を表す。

が規定され」、そして内蔵されている「どちらかの原初的作用の性格が全体的な作用の統一へと移行する」。その結果、統一された「全体的な作用が想像もしくは表意【意義志向】もしくは知覚となり」、「この統一的な作用が関係しあう場合に、一致と背反が生じる」(595)。ここで論じられている、複数の原初的作用の統一によって成立する「統一的な作用」、「複合作用」、「全体的な作用」が、意義志向や知覚といった客観化作用を意味していることは言うまでもない。すなわち客観化作用のすべての現象学的区別（その客観化作用が知覚であるのか、想像であるのか、意義志向であるのかなどの違い）は、結局それら客観化作用を形成する原初的志向(Elementarintention)に還元されるのである(594)。もちろん、客観化作用が独立的な作用としては最低次のものとされるから、この原初的志向とは客観化作用に内蔵された非独立的作用ということになる。

以上のことを客観化作用の具体的な例を用いて考えてみよう。意義志向という客観化作用の場合、紙に書かれたインクの「シミ」(記号)も、まず「何らかの物理的客観と同じ意味で与えられる」(420)。すなわち「客観としての記号は現出的作用の中で構成される。しかしこの現出作用は依然として表示作用ではない」(587)。したがってこの段階で意味統握が達成されているわけではない。そこで「新しい志向の結合、すなわち新しい統握の仕方の結合が必要となり、それによって直観的に現出するものかわりに、新しいもの、すなわち表示された客観が思念される」(587)のである。つまり直観的現出を可能にする作用には、当のインクの「シミ」(記号)によって表示されるべき意味の統握を可能にする、別の志向が統一されねばならない。そしてこの意味統握を可能にする志向の性格が全体作用の性格へと移行することで、この全体的な統一作用が意義志向と呼ばれることになる。

こうした客観化作用に内蔵される原初的な統握志向は、必ずしも同一的な性格をもつものとして考えられていない。そのことは大理石製の像を見る場合と比較するとよく分かる。

像表象の場合、まず直観的な「現出作用」によって現出するものは、単なる大理石で出来た事物ないしその形態である。そしてこの「現出作用」に、別の原初的志向が統一され、そしてその志向のうちで大理石の事物の形と類似した特定の人物が表象されることになる。このように、もう一つの別の原初的志向によってある特定の人物が表象される限りにおいて、この単なる大理石の事物が、特定の誰かを模した像となり得るのである。

ところで記号の意味把握も、像把握も、直観的な「現出作用」に別の原初的な統握志向が統一されることによって、何らかのものが思念される点では同じではあるものの、像把握の特徴は、内蔵される原初的志向が「現出作用」による現出内容と類似したものを表象する点にある。このように「現出作用」に統一され、しかもその現出内容と類似的な表象を担う原初的志向を、フッサールは想像的志向と呼ぶ(588)。

他方、意義志向の場合、「記号は表示されたものと内容的にさしあたって共通性をもたない」(587)。例えば「山田太郎」という形をしたインクのシミ(記号)を見て、その名前と呼ばれる人物の顔を思念する場合、現出している「山田太郎」という形

ないし筆跡と、その現出作用に統一された原初的志向のうちで思念されている、山田太郎という人物の顔や姿が類似しているということはあり得ない。このように「現出作用」によって現出したものと類似性を持たない内容を思念する原初的志向が表意的志向²と呼ばれる(588)。つまりフッサールにとって、現出作用による現出内容との類似性の有無こそが客観化作用に内蔵される原初的志向を種別する基準なのであり、現出作用を除くと、原初的志向は表意的志向か、想像的志向かに大別されることになる(595)。

以上の点をふまえて知覚という作用を考えてみる。知覚も客観化作用というクラスに属するため、意義志向や像表象と同じく、原初的志向の統一によって形成される「複合作用」に他ならない。しかし知覚は、像表象のように、現出内容と類似した対象を表象する作用ではない。「知覚は、その中で対象それ自身が現出するのであって、像において現出するのでないということによって性格づけられる。」(588)さらに知覚とは「現出作用」が現出させる対象それ自身を統握し、対象と表象の内容との間に「本質的で、内的な関係を成立させ」(622)、「事象的な同一性によって充実化されている」(588)作用とされる。したがって原初的な統握志向が表意的志向か想像的志向のどちらかであるとするならば、知覚のうちで「現出作用」と統一され、意味統握を可能にする原初的志向は表意的志向ということになる³。

ところで、この直観的に現出を可能にする「現出作用」が純粹直観と呼ばれる。「象徴的な構成素【表意的志向】⁴を除去することによって不純な知覚を制限していくと、その不純な知覚に内在している純粹直観が提供され」(613)、この純粹直観は「ただ充実するだけで、充実される必要のない」作用とされる。さらにフッサールは「思念されているものすべてが呈示されている。われわれにとってこのような新しい表

²本稿での「意義志向」という表現は、客観化作用に属する作用の名称として用いることとする。したがって「意義志向」と「表意」は共に客観化作用として同じものを指すが、「表意的志向」と呼ぶ場合、それは原初的志向に属する志向を指すものとする。しかし実際のフッサールの使用法は曖昧である。例えばフッサールが「私はしばしば意義志向の作用や意義する作用などという代わりに、表意的作用(signifikative Akten)もしくは表意的作用(signitive Akten)と呼ぶであろう」(567)と言うように、フッサールは、この語に関する客観化作用のレベルでの用法と、更にそれを形成する原初的志向のレベルでの用法を使い分けることなく議論を展開している。こうしたところにも『論研』というテキストの解釈を困難にする要因があると考えられる。

³ 事物知覚の対象は「対象は実際に与えられているわけではなく、すなわち対象は完全に全く対象そのものとして与えられているわけではない」(589)。実際、対象の前面に立つわれわれには、必然的に対象の裏面は見えていない。ところが、「見えていない裏側や内部の諸成素は、確かに多かれ少なかれ一定の仕方と一緒に思念され、第一次的な現出を通して象徴的に(symbolisch)暗示されている」(589)。この見えない裏面を表象する志向も、「第一次的な現出」に基づけられるため、原初的志向である。そしてこのようにフッサールは与えられた代表に対して、それとの時間的、空間的、経験的因果的な隣接関係によって喚起される表象を隣接代表象と呼ぶ。こうして知覚とは、純粹直観、対象統握を可能にする表意的志向、隣接代表象という3種類の構成素から形成されている。

⁴ フッサールは「象徴(Symbol)という語を、その根源的で現在も欠くことの出来ない意味に反して、記号と同義に使用するという、既に近世においてカントが非難していた間違った語法が広まった限り、象徴的も表意的と同義である。」(567)と述べている。

象を純粹直観と定義する」(612)とも述べている。したがって「純粹直観に還元された作用に関しては、直観的な内容がそれ自身既に質料全体を包括している」(618)のであり、いわば純粹直観は一切の表意的、想像的な質料(意味)を持たず、また一切充実されるべき空虚性を持たないという点で、「純粹」な直観なのである。だからこそ「象徴的な構成素(表意的志向)」と統一されている客観化作用としての知覚は、前出の引用文のように、「不純な知覚」と呼ばれることになる。

しかし注意すべきは、この現出を可能にしているだけの純粹直観も統握機能を持つものとされる点である。この純粹直観による統握作用が、「感覚内容のすべての部分と契機をそれに対応する知覚対象の部分や契機の自己射映として評価し」、「【感覚】内容全体に知覚像としての性格、すなわち対象の知覚的射映としての性格を与える」(590)。だからこそ「総合的な直観を純粹直観に還元するならば、その時生じてくるものは」、「直観的内容の連続」となるが、「その連続する直観的内容の中で、あらゆる対象的な契機が「常に変化する射映になる」のである(629)。したがって純粹直観とは、みずから感覚内容を捉え、そして統握することによって射映化、現出化する作用であることが分かる。したがって純粹直観も統握機能を持つことにより「代表-質料」の統一体を内蔵した作用であることになる。フッサールが『論研』の付録において、多義性がつきまとう「現出」という概念を三つに分類し、その第一の意味として「現出とは、第六研究で代表象として定義したものと一致する」(763)とする理由はここにある⁵。ただし繰り返すが、この純粹直観は統握によって現出を可能にするだけであり、したがって例えば表意的志向がこれに統一されない限り、記号の意味把握などは達成されない。

しかし上述のように、知覚にも表意的志向が内蔵されているとすると、意義志向も知覚も、純粹直観と表意的志向が融合した統一作用であることになる。したがってフッサールが考える知覚と意義志向とは、その本質的構成素という観点において差異がないことが判明する。では知覚と意義志向は、いかなる点において異なった客観化作用であるのか。

例えば知覚の質料が同じであれば、それらの対象は同一のものとして把握されている。しかし「同じ質料に際して認識作用が完全性の段階を許容するならば、質料が【認識作用の】完全性の差異に対して責任を負っているわけではない」(597)。フッサールは、このような認識の完全性に差異が生じるのは「表象が明晰であればあるほど、その表象の生き生きさ(Lebendigkeit)が大きいほど、またその表象が達する像性(Bildlichkeit)の段階が高いほど、その表象は充実(Fülle)がより豊かになっている」(608)からだとして述べる。

ところでこの引用文に登場する充実(Fülle)とは「性質と質料に対する新しい、特に補完という仕方で質料に属する直観的な作用の契機」、または「性質や質料と並ぶ表象の特徴的な契機」とされる(607)。つまり充実(Fülle)とは純粹直観によって与えられ

⁵ 「現出」の意味として、後の二つをあげておく。二つめが「直観された対象」。三つ目が一つめの意味すなわち「代表象(代表と質料の統一)」のうちの「実的成素」、つまりは「代表」のことであるとする。

る感覚内容を指したものであることが分かる。したがって充実(Fülle)という概念は、意義志向と直観の合致統一を意味する充実化(Erfüllung)と区別されねばならない⁶。

他方、フッサールは「対象の徴表を類似化する契機」すなわち感覚内容が「純粹に直観的な統握の基盤として考えられ、そしてこの統握がこの契機に初めてそれに対応する对象的な契機の代表の性格を与える」と言い(608)、対象統握の基盤として機能する限りにおいて、感覚内容のことを「代表(Repräsentant)」ないし「代表的内容」とも呼ぶ。そしてこの「代表」のことを「Fülleとして名称化することは、まさに相対的、かつ機能的な名称化であり、この名称化は、作用を通して、また可能的な充実化綜合におけるこのような作用の役割を通して、内容に与えられる性格を表現している」(616)とも述べている。

つまり Fülle も代表も、共に感覚内容のことを指した名称であるが、このような名称的区別は、直観内での感覚内容の機能性の相違に焦点を当てたものであることかわかる。すなわち Fülle という名称は、感覚内容が表意的志向に対して内実と对象的関係を与えるという機能的な側面を表現したものであり、また「代表」という名称は、与えられている感覚内容が対象やその徴表の類似的な契機として、原初的志向が統握を行うための基盤となる時の機能的側面を表現したものであると言える。

こうして Fülle と代表という概念を用いることで、同種の原初的志向から構成される意義志向と知覚との構造的差異が明らかになる。たしかに意義志向も知覚も、内蔵される表意的志向が純粹直観による感覚内容を統握するという点では同じである。しかし意義志向の場合、純粹直観による感覚内容が表意的志向に内実と对象的関係を与えるわけではないので、その感覚内容は Fülle としては機能していない⁷。だからこそ意義志向は「充実(Fülle)の契機を欠いており、したがって客観化作用にとって一般的に性質と質料のみが本質として妥当する」(626)と言われる。それに対して知覚の場合、感覚内容が単に代表としてだけではなく、Fülle としても働いていることで表意的志向が内実と对象的関係をもつことになり、またそのことによって知覚それ自身がすでに充実化している作用となり得る。意義志向内において純粹直観が与える感覚内容は、あくまで「代表」として意味統握の基盤となっているに過ぎない⁸。

⁶ 『論研』では、直観的作用と空虚な志向の合致を意味する「充実化(Erfüllung)」と、ここで問題となる充実(Fülle)とは概念的に明確に区別されねばならない。本論文がErfüllungを「充実化」と訳し、「充実」と訳さないのはここに理由がある。したがって今後この二つの術語を混同しないためにも、Erfüllungを「充実化」と日本語で書き、Fülleをそのままドイツ語で書くことにする

⁷ フッサールは、意義志向にとっての感覚内容は「真の意味で(in Wahrheit)充実(Fülle)ではない」とし、また「記号を直観的な客観として構成する、表意的作用を基づける作用の充実(Fülle)」であるとも述べている(626)。

⁸ この意義志向における代表の問題は極めて難解なことがらを含んでいる。そもそもフッサールは「純粹に直観的な統握の基盤として考えられ、そしてこの統握がこの契機に初めてそれに対応する对象的な契機の代表の性格を与える」(608)と述べており、「代表」とは、単なる、すなわち純粹な感覚与件そのものではなく、統握に際してある種の構成がなされたものと考えられる。例えば文字記号の意味を把握する場合、厳密に言うと同一種の文字であっても人によってその文字の筆跡は異なり、またその文字表記に使用されているインクの色や、材質も異なる。しかしフッサールは、この時、「代表」として意味統握に必要なのは、実際に与え

3 範疇的知覚を基づける感性的知覚。「端的」と表現される作用様態の単一性。

あらゆる志向的作用の基礎となる客観化作用は、作用性質の違いによって措定的作用（対象を存在者として思念する）か非措定的作用（対象の存在についての断定留保）に、そして質料の違いによって命題的作用か名辞的作用に区分される(501)。本稿の目的は知覚の構造分析にあるから、非措定的な作用は考察外に置くとして、問題となるのは措定的な命題的作用と措定的な名辞的作用ということになる。すなわち赤い花を見た時の知覚意味として、命題「この花は赤色である」が構成されるか、もしくは名辞「この赤い花」が構成されるかである。

ところで命題的な客観化作用（知覚）によって、「この花は赤色である」という知覚意味が構成される時、この知覚は顕在的で感性的な対象と関係しているとはいえ、この知覚と相関するものは感性的な対象ではなく、「この花」が「赤色」という契機をもっているという「事態」である。フッサールはこのような客観的な「事態」を相関者にもつ作用も、「措定的な命題的作用としての判断」(500)といったように、「判断」と呼び、そしてこのような「判断」を構成する知覚作用が範疇的知覚と呼ばれる。周知の通り、範疇的知覚は感性的知覚に基づけられた作用であるとされ⁹、しかもフッサールは「感性的もしくは実在の対象を我々は可能的な直観の最も低次の段階の対象として性格づけ、範疇的もしくは理念的対象を高次の対象として性格づけることができる」(674)と言う。すなわち感性的知覚と範疇的知覚とはそもそも異なった対象を相関者に持つ。しかしここで注意すべきは、例えば「この花は赤色である」という事態と相関する知覚それ自体が一つの客観化作用であるということ、すなわち、感性的知覚に範疇的知覚が基づけられたその全体的知覚が、ひとつの事態を構成するひとつの客観化作用として統一されているということにある。換言すれば、範疇的知覚が感性的知覚に基づけられていると言われる時、その「範疇的知覚」や「感性的知覚」という作用そのものが、実は「この花は赤色である」という意味を担う知覚全体を構成するための非独立的な構成素なのである。勿論この基づけ関係は、例えば客観化作用に感情志向や価値志向が基づけられるというような関係とは根本的に異なる。フッサールが「措定的な命題的作用としての判断」という時の「判断」は範疇的な客観化作用によるものであり、これと客観化作用に基づけられた高次の判断志向による判断を混同してはならない。

このように範疇的に形式化された知覚も客観化作用に属する知覚であると理解す

られたそのものではなく、その感覚与件から習慣的に繰り返され抽象化された形態のみであると言う(619)。では何が純粹な感覚与件から抽象化を行うのか。この抽象化という作用も、統握に際して表意的志向が行う「生気づける」ということの一つなのか、もしくは感覚与件が統握される前にすでにある別の構成が働いているのということなのか、この問題については『論研』で扱われることはない。

⁹範疇的知覚という場合、感性的知覚との現象学的区別を強調する際に用いられる、基づけられた作用としての範疇的知覚と、その範疇的知覚が感性的知覚に基づけられることによって構成される、「事態」を相関者として持つ知覚全体（この作用も範疇的知覚と呼ばれうる）を区別しなければならない。

ることによって、範疇的知覚も、本稿の2で確認したような原初的志向のレベルにまで還元して考察され得るものとなる¹⁰。そして感性的知覚と範疇的知覚との構造的差異を浮き彫りにしてくれるものが、フッサールの提示する二種類の「形式」、すなわち「感性的・実在的形式」と「綜合化する形式」である。

フッサールが第三研究でも論じているように、一つの対象における全体と部分の関係、または部分と部分の関係そのものは、眼前にある対象自身が持っている形式である。このような形式をフッサールは「感性的な、もしくは実在的な結合形式」(684)と呼び、さらに「感性的結合とは、実在的な対象の契機であり、対象の現実的な契機であり、たとえ含意的であっても、それは実在的な対象のうちに存在し、そして抽象的な知覚によって実在的な対象から取り出される契機」(684)であると述べる。このフッサールの言葉に従うならば、感性的形式があくまで「実在的な対象から取り出される契機」である以上、この感性的形式も純粹直観による感性的な代表を原初的な表意的志向が統握することで把握されることになる。感性的形式の統握が「抽象的な知覚」と呼ばれざるを得ないのは、「具体的なものに際して表象する作用は直接的な作用であり、したがって他の表象作用を基礎に必要としない限りで独立的な作用であるが、しかし抽象的な内容を把握する作用は、その内容に付属する具体的なものの表象作用が基礎を形成しなければならない限りで、間接的で非独立的な作用」(252)であるからに他ならない。言うまでもなくこの「抽象的な内容」には色彩契機はもちろんのこと、感性的形式も含まれる。したがって、感性的形式を統握する表意的志向は、具体的なものを統握する独立的な表意的志向にその存立を依存する¹¹。しかしフッサールは「だからといってこの直観【抽象的契機の直観】が基づけられた作用でなければならないということを述べているのではない」(680)と言う。つまり感性的形式の統握も、あくまで他の具体的な内容を統握する表意的志向と同様、実在的な対象を統握する感性的知覚に属するのであって、決して基づけられた高次の範疇的作用に属するものではない。

また「感性的な対象は一つの作用段階における知覚のうちに現存する。感性的な対象は、多光線的に高次の段階において構成されねばならないという必然性には支配されない」(674)から、知覚言表内の複数の素材的成素と形式的成素（感性的形式）は、それぞれ別々の原初的な表意的志向が、純粹直観による感性的な代表を、単一光線的に統握することで成立する。すると知覚において「旗の色は、赤と(1)白と(2)

¹⁰ ただし、フッサールは『論研』第六研究第二篇で、範疇的知覚も代表象であることの論証に努めるものの、範疇的知覚を原初的志向にまで還元して考察することはしない。したがって本稿でのこれらの考察はあくまで理論的な要請という域を出ないことを明言しておかねばならない。

¹¹ 本稿で後にも少し触れることになるが、このあたりのフッサールの解釈には注意が要する。S252において、非独立的な契機の統握には、その内容に付属する具体的なものの表象作用が「基礎になければならない」とは述べている。しかし第六研究の第47節では、抽象的契機の統握に際して、それを補完するための具体的な全体に対する対向(Zuwendung)の作用としての把握が先行する必要はないとする。つまり抽象的契機を統握するには、その基礎としての全体の表象は必要だが、だからといって注意的な対向による把握が必要されるわけではない。

青である」と表現されうる客観的事態が高次において構成され得るためには、まず低次では、純粹直観が与える感覚内容に対して、「赤」や「白」などの契機がそれぞれ別々の表意的志向によって単一光線的に統握されているだけでなく、「と(1)」と「と(2)」も、それぞれ別々の表意的志向によって単一光線的に統握されていなければならない。つまりそれぞれの部分、徴表、形式に対して別々に単一光線的な表意的志向が統握を行っているのである。

しかしここで低次における感性的知覚の特徴があらわれる。「と(1)」という感性的形式は「赤」と「白」の契機を結合するが、決して「白」と「青」の契機を結合するものではない。また「と(2)」は「白」と「青」を結合するが、「赤」と「白」は結合していない。つまり基づける感性的知覚の段階では、単に個々の素材的成素となるべき質料がそれぞれ異なった感性的形式によって連結されているに過ぎない。つまり低次における感性的形式による結合では全体的な事態と相関することが出来ないのである。そこで客観的な事態と相関するためには、これら一つ一つの感性的知覚が高次の段階で、「多光線的」に綜合化される必要が生じる。つまり「範疇的な結合の形式は作用綜合の仕方に属する形式」(684)なのであり、たとえば「AはBに隣接する」という知覚の場合、「AとB、そして隣接【という契機】についての直観の形成では、依然として『AはBに隣接している』という表象を提供しない」のであり、「AとB、そして隣接【という契機】を適切に形式化し、結合する作用を必要とする」(685)。あくまで統握された素材的成素や感性的形式を高次において綜合化する範疇的作用があつてこそ、客観的な事態が構成され、「全体的な概念が現前する」¹²(700)。そしてこの高次において綜合化する作用も、事態を構成する一つの知覚に内蔵される原初的志向であり、またそれが類似化的表象でない限り、表意的志向とならねばならない。

以上の考察から、範疇的知覚を基づける感性的知覚とは、低次において純粹直観と原初的な表意的志向が統一した成素的な作用だと言える。特にこれらの一つ一つの感性的知覚は単一光線的に統握を行うため、独立した対象全体を統握した作用だけでなく、その対象の非独立的契機、すなわち色彩契機や実在的形式を統握する作用も、それらが感性的な代表を統握する以上、それぞれが感性的知覚と呼ばれ得る。例示するならば、「旗の色は赤と白と青である」という事態を構成する知覚の場合、基づける感性的知覚において、対象全体（「旗」）を統握する作用、対象の契機（「赤」

¹² ところで範疇的知覚の質料は「基づける作用の質料に基づけられている」(704)。しかも範疇的に綜合化する知覚は、「基づける作用を結合する心的内容」が、「統握されるという仕方で成立する」(705)するため、「範疇的な作用形式は、その基礎にある感性的な内容に対して、感性的な関係を持たない」(703)と言われる。すなわち「綜合の契機は決して基礎作用に属する代表の直接的な結合を成立させない」(702)のである。つまり感性的形式は、あくまで純粹直観が与える感性的な代表を介して統握されるが、高次における範疇的に形式化は、決して純粹直観が与える感性的な代表と直接的に関係しない。フッサールは高次の範疇的知覚も、「代表—質料」という本質的契機を内蔵する代表象であることを強調する。したがってこの範疇的知覚の代表とされる「基づける作用を結合する心的内容」がいったい何を指したものであるのかという問題が残されはする。しかしここで大切なことは、高次における範疇的形式化のための代表が、決して対象の実在的契機と相関する感性的代表ではないことにある。

など)を統握する作用、そして実在的な形式(「と」)を統握する作用、各々すべてが感性的知覚と呼ばれることになる。ただしこれら一つ一つの作用は、客観化作用としての範疇的知覚の構成素に過ぎないのだから、正確には非独立的な「原初的知覚」と呼ぶべきであろう。

フッサールは「端的な知覚」は感性的知覚であるとする。すると範疇的知覚を基づける一つ一つの非独立的「原初的知覚」は、それらの対象が非自立的な色彩契機や感性的形式であろうと、いわば「端的な知覚」であるということになる。またこの色彩契機や感性的形式を統握する「原初的知覚」は、単一光線的に対象を統握する。したがってフッサールが用いる「端的」という語の意味は、単に原初的知覚における作用様態の単一性(単一光線的)を表したものであると考えることができる。またこれは高次において綜合化する作用が多光線的な性格をもつこととの対比的表現と解釈することもできよう。例えばフッサールが「端的な、感性的直観は、極めて多様な感性的性質、感覚可能な形式を代表象の目的に利用することができる」(699)と言う場合の「端的」という語の意味は、低次の知覚に内在する非独立的な「原初的知覚」の単一性という作用様態を指したものと言える。しかし『論研』を讀解していく中で、以上のような意味で「端的」という語を解釈していくだけでは、「端的な知覚」という概念と様々な矛盾を生じさせる箇所が現れる。

4 根源的に対象の存在を措定する「端的な知覚」。

第五研究において、客観化作用としての名辞的作用と命題的作用との対立関係は、「単一光線的作用—多光線的作用(綜合的作用)」という対立関係に置き換えられる。

たとえば白い紙を見て、「この紙は白い」と言表すると命題的作用と呼ばれる。しかしこれは「この紙」と「白」という色彩契機との「全体一部分」関係が捉えられた範疇的知覚と呼ぶこともできる。それに対して、同じく白い紙を見て「この白い紙」と言表すると、それは単一光線的な名辞的作用と呼ばれることになる。

ところでこの単一光線的な名辞は、更にこの名辞を内蔵する「この白い紙は机の上にある」といったような、多光線的な範疇的知覚を表現したときの素材的成素にもなることもできる。この時もし、本稿3で確認したように、単に単一性という作用様態を「端的」という語義として定義するならば、「この白い紙」と名辞化された知覚も「端的な知覚」と呼ばれ得ることになる。

しかしこのような名辞的作用による名辞は、確かに単一光線的に客観化された項ではあるが、「単一光線的な項が、やはり名辞化された綜合でありうる」(502)のだから、単に名辞を取り上げただけで「究極的な意味で原初的な項にたどり着いたわけではない」(502)。つまり「【名辞的作用の】質料の中に多かれ少なかれ複雑な再帰性があらわれ、そしてそれによって本来的に変様された間接的な意味で含蓄的な分節化と綜合的な形式があらわれる」(502)のである。

「白」という色彩契機も対象がもつ契機であり、感性的な対象ではあるが、既に確認したように、「抽象的な内容を把握する作用は、その内容に付属する具体的なものの表象作用が基礎を形成しなければならない限りで、間接的で非独立的な作用」

(252)であるとされるため、「白」という非独立的契機を統握する志向のみが存するということはありえない。「我々が知覚を表現しながら、『白い紙』という場合、その紙は白としてというよりはむしろ白いものとして認識されている。・・・『白いもの』とはすなわち白である紙である」(660)。つまりその感性的契機が「白」として認識されるときには、すでに「紙」が認識されていなければならない。「この白い紙」という知覚には、既に範疇的形式化による「全体一部分」関係が内含されているのである。

またさらにフッサールは、例えば「白」という対象的契機(部分)を統握するということは、必然的に「直観の非自立的契機は単なる部分ではなく、むしろ我々は、一定の(概念的に媒介されていない)仕方でその非自立的契機を部分として把握して」(246)いる¹³と考える。「部分を一般的に与えられた全体の部分として把握すること、すなわち感性的な徴表を徴表として把握すること、感性的な形式を形式として把握することが、純粹に基づけられた作用」(680)を意味するのだから、「白」という例のみでなく、あらゆる対象の契機や形式を統握した感性的知覚は、必然的に範疇的形式化による基づけ関係を内含してしまっていることになる。このようにフッサールの記述を追っていくと、命題的作用のみならず、単一光線的に統握している名辞的作用にあっても、非自立的な対象的部分の感性的統握は、必然的に高次の範疇的形式化を伴っていることがわかる。

しかしこのようにフッサールの記述を追うと、果たして範疇的な総合を伴わない感性的知覚認識などというものが有り得るのだろうか、という疑問が生じる。我々による読解が正しいとすれば、たとえ感性的な対象と関係する知覚作用であっても、その対象がもつ感性的契機、感性的形式の統握を行った段階で、その知覚全体はもはや感性的知覚としては存立せず、高次の範疇的作用による総合がなされてしまっている。したがって本稿の3で確認したような、さまざまな感性的契機や感性的形式を統握する非独立的な「原初的知覚」も、単に感性的な代表を統握しているという観点において確かに感性的知覚であり、単一光線的という観点において「端的な知覚」であると言えるが、それはあくまで静態的な現象学的な分析によって析出され得るものに過ぎず、事実上そのような知覚の能作は範疇的知覚の総合化的能作に覆い被されている。

ところがフッサールは「対象全体が紙として認識され、唯一の形式としてではないが、ここ【白い紙】でも存在を含む補完形式【白である紙】が認識されている。しかし端的な知覚の充実化の能作は、そのような形式に明らかに到達はしえない」(660)と言う。また「端的な知覚」は、「基づける作用、もしくは基づけられる作用という組織(Apparat)は必要がない」(676)とされ、さらに「基づけられた作用による総合の形式が、部分的な諸志向に対象的な関係の統一をもたらすかのように、固有の

¹³ だからといって、フッサールは全体に対する知覚に際して、同時に「全体として」も把握しているとは決して言わない。統握の二重性は、あくまで部分、契機などに対してのみである。

総合的な作用によって生じるのではない。分節化やしたがってまた顕在的な結合を必要としない」(677)。つまり「端的な知覚の中で、対象全体は明示的に、あらゆる全体の部分は含意的に与えられる」(680)のである。「端的な知覚」において構成される質料は、あくまで対象全体と相関するものでなければならず、したがってそれは分節化されてはならず、「赤い」「白い」といった対象の色彩契機や対象の实在的形式は、決して明示的に統握されず、また表現化もされ得ない。この意味で「端的な知覚」を定義すると、明らかに感性的かつ単一光線的であっても、色彩契機や感性的形式を統握する知覚は、「端的な知覚」ではあり得ない。

こうして「客観化作用の分析は、それに含まれている名辞化への遡示の段階を追跡」する必要に迫られ、その結果「究極的に形式と質料に関して単層的で」、「端的な作用項に帰着」(503)することになる。こうしてたどり着いた「端的な作用項」こそが、「完全に端的な客観化」であり、この客観化こそが「すべての範疇的形式から免れている」(503)のである。こうして究極的な単一項にまで遡源したところに現れる知覚的(措定的な)名辞化がすべての範疇的形式化を伴わない「端的な知覚」であることがわかる。これは分かりやすく言うと、眼前にある対象全体を一挙に把握し、それを名辞的に名付けることに他ならない。

以上で、「端的な知覚」とは眼前の対象全体を単純に名付けるという名辞的作用を意味するということが明らかにされた。しかしこうした単一項的な知覚的名辞化が真の意味で究極的な、すなわちこれ以上遡源不可能と言える作用であるのかと言えば、そうとは言えない問題が残る。知覚による名辞化は、それが客観化作用である限り、「措定的」という作用性質を持たねばならない。フッサールは「人は、『潜在的』に『Sがある(Es gibt S)』ということをも認めなければ、『このS』ということを取り上げることはできない」(489)と述べ、そして「何らかの措定的な名辞を伴った命題が妥当し、この名辞に対応する存在判断が妥当しないということは、アプリアナ両立不可能性」(489)であると言う。勿論ここでフッサールが言う「存在判断」とは、あくまでも『Sがある(Es gibt S)』ということの意味しているということとは言えない¹⁴。

この点をもう少し詳しく検討してみよう。既に確認したように、範疇的知覚(=判断)の相関的对象は「SはPである」といった事態である。例えば「この花は赤色である」という範疇的な知覚言表を考えてみよう。この知覚言表は、対象全体としての「この花」と「赤色」とが「全体一部分関係」を有しているという客観的な事態、すなわち「『この花』が『赤色』という契機を部分として持っている」という客観的事態を構成している。したがってこの知覚言表に含まれる(sein)は「花」や「赤色」という色彩契機の現在の「存在措定」が表現化されたものではなく、むしろ両者の「全体一部分関係」が表現化されたものであると言える。確かに名辞化する

¹⁴ こうしてフッサールが用いる「判断」とは、①客観化作用に基づけられた高次の「判断志向」、②客観化作用としての範疇的知覚における「事態」と相関する能作、③「端的な知覚」における「存在措定(Es gibt S)」の3つが区別され得る。

「端的な知覚」とは、感性的な自立した対象全体を名付ける作用である。しかしこの知覚的な名辞的作用は、さらに根源的な意味での「知覚」、すなわちその名辞的な作用そのものを支え、対象を現在的に一挙に「存在措定」する「知覚」がなければ存立できない。

他方、我々が今考察している「端的な知覚」は、非分節的で総合化されない作用であるから、純粹直観がさまざまな对象的契機を感覚内容として与えていたとしても、対象の感性的部分・感性的徴表は「端的な知覚」の質料のうちに担われることはない。フッサールは対象を「端的な」仕方で統握する場合、「対象はいわば我々の前に単純に存在している。その対象を構成する諸部分は確かに対象のうちに存在するが、端的な作用の中では明示的な対象にならない」(681)と言い、また「端的な知覚」は「事物が個々のものに分解され得ず、常に完全で統一的な事物であり得ると同じように、常に対象を単純で、直接的な仕方で現在化する同質的な統一」(677)であるとも述べている。したがって「端的な知覚」のうちに担われるという「存在判断」は、客觀的事態を相關者とする判断とは区別されねばならない。そこで我々は誤解を避けるため、「端的な知覚」が担うものを「存在判断」とは呼ばず、「存在措定(Es gibt S)」と呼んでおくことにする。あらゆる単一的な知覚的名辞化は、潜在的に対象そのものの「存在措定(Es gibt S)」を必要とするのである。

以上のように、ある対象に関する単一項的な知覚の名辞化も、まずその対象の「存在措定(Es gibt S)」を潜在的に必要とする。そしてもし単一項的な知覚の名辞化が「完全に端的」であり、「範疇的形式から免れている」のだとしたら、この名辞を潜在的に支える「存在措定(Es gibt S)」も範疇的形式から免れていなければならない。したがってこの対象そのものを「存在措定(Es gibt S)」する知覚作用も「端的な知覚」でなければならない、また最も根源的な意味での「端的な知覚」となる。またこの根源的な「端的な知覚」こそが、感性的で自立的な対象全体を相關者とする、真の意味で自立可能な感性的知覚であると言える。

そして今我々が確認した根源的な意味での「端的な知覚」こそが、『論研』におけるフッサールの現象学的分析にとって、重要な方法的基盤とでも言うべき役割をもつ。

5 認識の基盤

「端的な知覚」の、対象全体を非分節的に一挙に現在化させ、しかもあらゆる契機、断片、形式を「暗示的に」含んでいるという性格こそ、フッサールによる現象学的分析を根幹で支えている方法的基盤として機能していると考えられることかできる。

そもそもフッサールは、先行する空虚な意義志向に直観が一致しない場合、つまり「背反」が生じる場合も、「背反は何らかの一致の基盤を前提としている」(573)と言う。つまり「背反」という不一致が、「背反」するものをより包括する全体の同一化によって基づけられている。たとえば「あの家は赤色だ」という表現を聞いた後に、実際には青い家を知覚した場合、空虚な意味としての「赤色」と知覚された「青色」が背反すると言われるが、背反しているのはあくまで「あの家」という

全体に対する部分である。つまり志向は「それがより包括的な志向の部分であるということによってのみ、背反という仕方で幻滅される」(576)のであり、「単純な個々の作用においては、背反という問題はありません」(576)。勿論ここで重要なのは、部分における背反という不一致そのものにあるのではなく、フッサールが構築する理論では、対象全体の同一化的措定が前提にされている点にある。こうしたフッサールの考え方を、「端的な知覚」と部分に対する原初的知覚の問題に応用させてみる。

例えば「スイッチは画面の横にある」という範疇的知覚言表を構成する場合、まず低次において「スイッチ」、「画面」、隣接契機などがそれぞれ別の原初的な表意的志向によって統握される必要がある。これまで我々が見てきたように、これらの対象はすべて「テレビ」が有する実在的な部分、契機である。しかしここで当の「テレビ」は、「スイッチは画面の横にある」という知覚において主題化されていない。ところがフッサールは「具体者全体が際ただされることの方が、互いに離れたその具体者の内容の諸契機が際立つことよりも先なのである」(251)と述べ、さらに「非自立的契機が、それが属する具体的な全体内容が統一的な際立ちになりうること無しに、それ自体で注目されないことはない。・・・もし形態(Figur)や色を所有する客観全体が際立ってこないとしたら、我々は形態や色をそれ自体で注目することは出来ない」(246)とも述べている。つまりこの根源的な層で「客観全体」の存在を措定するための知覚こそが、「端的な知覚」であると考えることができる。「スイッチは画面の横にある」と言う時、「スイッチ」や「画面」を包括する全体的対象としての「テレビ」が顕在的に存在していることは、後から認識されるのではなく、既に「存在措定」されているのである。そしてその能作こそが「端的な知覚」なのであり、また「事物を現在するものとして現出させるという性格が端的な性格」(676)なのである。この場合、いわば「端的な知覚」による全体統握が主題化されていないだけなのである。

対象における各項は全体に対する部分なのであり、それら部分の統握に先立って、それらを含む全体そのものの存在が措定されている。これを志向という側面から言うと、個々の原初的な表意的志向による諸部分や諸形式の統握は、そもそも全体についての存在措定がなければ成立しない。いつもこの「端的な知覚」が主題化されるわけではないのは、確かに「抽象的な内容を把握する作用は、その内容に付属する具体的なものの表象作用が基礎を形成しなければならない」(252)のだが、だからといって抽象的契機の統握に際して、それを補完するための具体的な全体に対する「直観的な対向(Zuwendung)の作用としての把握」が常に先行する必要がないだけなのである(680)。

結論

以上のことは、意識内における作用構造に重要な意義をもたらす。「端的な知覚」による包括的で全体的な「存在措定」が前提されることにより、フッサールによる感性的知覚の総合が、まず複数の部分的な表意的志向（たとえば「家」、「赤」、「白」、「と」、「である」などに対応する表意的志向）があり、ついでそれらが総合される

という、部分から全体という方向、すなわち各要素的志向の合成として考えられているわけではないことがわかる。つまり志向的作用の構造においても、まず包括的な全体的志向があり、その全体的志向のうちに含蓄的に含まれる部分的志向が、必要に応じて主題化されるという構造をもつわけである。フッサールは次のように述べる。「通常、すべての部分作用の統一を包括し、それらすべてを自らのもとに有する作用性格は、最も大きな活力(Aktivität)を発揮する。我々は特にこのようなすべての部分作用を包括する作用のうちに生きているのであるが、しかし従属する諸作用【部分作用】のうちには、全体作用やその志向にとって、その従属する作用の能作の重要性に応じて生きているに過ぎない」(419)。フッサールにとって、顕在的で同一化的な全体的措定こそ明証であり、あらゆる部分把握、関係把握は、この明証に基づいている。そうした認識の基盤としての役割を担っているのが、最も根源的な意味での「端的な知覚」であると結論づけられる。そしてフッサールによる一見要素還元的とも思える意識内成素分析には、常に「端的な知覚」による全体的な措定が担保にされていると考えることができる。すなわち『論研』におけるフッサールの意識内成素分析は、すべての部分を含む的に包括する全体作用、全体統握のうちで静態的に行われているのであり、そしてまたこのように考えることによって、複雑に形式化された認識作用も要素的志向の合成物となることを免れる。まさにこのことこそ、フッサールが『論研』において分析展開する「知覚の構造」の本質条件として確認されるべきであり、またもしこの「端的な知覚」による全体統握という前提性を失えば、『論研』における知覚理論は、その意識内成素分析の精緻さ故に、常にどこか要素還元主義的な匂いを感じながらの読解を余儀なくされることになる。